

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 **A Minimalist Approach to Preposition Stranding and Pied-Piping in English**
(英語における前置詞残留及び随伴へのミニマリスト・アプローチ)
氏 名 松元 洋介

論 文 内 容 の 要 旨

英語において、前置詞の目的語を **wh** 疑問文で尋ねたり、あるいは関係詞節化する場合、二つの方法が考えられる。一つ目は **wh** 句のみを前方に移動させる方法であり、もう一つはその **wh** 句を含む前置詞句を前方に移動させる方法だ。前者は前置詞残留、後者は前置詞随伴と呼ばれる。通言語的観点から見ると、英語はこのような二つの選択肢が許されているという点で珍しい言語である。また、通時的観点から見ても英語は前置詞残留に関して興味深い歴史的変化を遂げている。古英語では、前置詞残留はごく一部の文脈でのみ可能であっただけで、現在の英語以外の多くの他言語と同様不可能であった。ところが、中英語の間に前置詞残留の使用は大幅に拡大した。一方前置詞随伴は、ほとんどの言語で許されるのだが、随伴されうる要素は前置詞以外にも多岐にわたる。しかし前置詞随伴の分布に関しては、いかなる制限が課せられるのか明確であるのに、それに対する理論的説明はこれまでほとんど与えられてこなかった。本論文はこのような背景を踏まえ、前置詞残留及び前置詞随伴に対し三つの問題を設定し、理論に基づいた解答を与えることを目標とする。その際に、生成文法の最新の理論的枠組であるミニマリストプログラムを採用する。

具体的には、まず二章では、前置詞残留に関して前述のような変化が起こったのはなぜかという問題に対する解答を与える。本論文は、「文が派生されていく過程で、語順に関する情報は変更されてはいけない」という Fox and Pesetsky (2005)の考えに基づき、古英語において前置詞残留が許されなかったのは、その派生が前置詞とその目的語の語順を変更してしまうためであると主張する。さらに、中英語以降前置詞残留の使用が拡大したのは、中英語期に起こった語順の変化によって、前置詞残留の派生が語順を変更しなくなったためであると主張する。

次に、三章では定形節における随伴の問題に取り組む。随伴される要素は前置詞以外にも形容詞や副詞、名詞句、さらには不定詞節も含まれる。しかし、不定詞節が随伴

される場合、顕在的主語は現れてはいけない。本論文は、随伴される不定詞の構造を再考し、それらは一種の前置詞句であると仮定することで、なぜ主語が現れない場合にのみ不定詞節の随伴が許されるのかに対する問題に解答を与える。すなわち、そもそも前置詞句には主語は生起できないのだから、主語が現れる不定詞節の随伴は許されないのだ。

最後に、四章は不定詞関係節における随伴の問題を扱う。不定詞関係節は、普通は関係詞が現れることは禁じられているのであるが、その関係詞が前置詞を随伴している場合に限り顕在的に現れることができる。本論文はこの問題を派生の経済性という観点から解決する。すなわち、随伴をする場合とそうでない場合を比べると、前者の派生のほうが派生の中で適用される操作の数がすくないためにゆるされるということである。